



所報



No.11

佐賀県教育センター
平成10年10月30日



もくじ

◆特集 子供の生きる力を育てる I	2~3
・総合的な学習	
◆指導と評価シリーズ	4~9
・小学校理科『地域の特色を生かした教材の工夫』	
・中学校国語『子供の側に立つ「教材化」』	
・高校英語『四領域の有機的な関連を図った「英語Ⅰ」の指導と評価』	
◆佐賀再発見シリーズ	10
・子供たちの音づくり（邦楽・洋楽）	
◆校内研究～我が校の取組～	11
・武雄市立朝日小学校	
・伊万里市立東陵中学校	
◆メッセージボード	12
・教育講演会の報告	
・平成10年度長期研修生の紹介	

《巻頭言》

再び「21世紀を展望した学校教育の在り方」

副所長 小副川 忠 征



またかと思われそうだが、学校教育をかえるには、教師の意識の変革が今最も求められている。

前に副島前次長が巻頭言（所報6号）「21世紀を展望した学校教育の在り方」において「自己教育力」並びに第15期中教審提言のキーワード「生きる力」にふれ、21世紀に向けての教育の在るべき姿の中で「教師が変わらなければ学校は変わらない」と教師の意識の変革を強く求められていた。

来る21世紀、学校週5日制の実施を間近にし、国際化、情報化、高齢化や少子化等の社会の変化への対応、いじめや不登校の問題をはじめ、心と体の健康の問題など、新しい教育の在り方が問われている。

このことは、昭和46年の第9期中教審で、「第三の教育改革」を掲げての答申から始まったと言えよう。その後の流れとして、「自己教育力」、現学習指導要領における「新学力観」に受け継がれ、更に第15期中教審・教課審答申での「生きる力」の強調となっている。「生きる力」とは、「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考える力、正義感や倫理観等の豊かな人間性、健康や体力」を指し、これらを子供たちに身に付けさせようというのである。

この「自己教育力」「新学力観」「生きる力」は、一貫

して知識伝授の教育から、自ら学び自ら考える教育への転換を求めている点では一連のものと言えよう。

知の面については、知識・理解中心の内容知から、学びの方法、学び方としての方法知を重視している。徳の面でも自らを律しつつ、他の人と協調し、他を思いやる心、感動する心、正義感・倫理観の育成に重点をおき、今までの教育・学力観を大きく転換しようとしている。そしてその一つが「総合的な学習の時間」の創設である。先の答申を読むかぎり、基準としての目標・内容については、各学校、教師自らの創意工夫にゆだねられ、これを教師集団としての力を發揮する絶好の機会と受け止め、積極的に取り組んでいく必要があろう。

教育は、時代を超えて不变なものを見つめると共に、時代と共に変化していくものを受け止め、的確に対処していくなければならない。その実践面において、先頭に立つのが専門職としての私たち教師集団であろう。

鋭敏かつ柔軟な思考で積極的に教育改革のけん引者にならなければ、国民の期待する21世紀を目前にした教育改革は校門の外で何んだままとなるのではないだろうか。

一小学校における「総合的な学習の時間」の実施に向けての取組ー

2002年から新たに『総合的な学習の時間』が創設されることになりました。

『総合的な学習の時間』とは、どんな学習の時間になるのか、小学校における実践の在り方について考えてみます。

ねらい

各学校の創意工夫を生かした横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心に基づく学習などを通じて、次のようなねらいを設定します。

- ① 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。
- ② 情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付ける。
- ③ 問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成する。
- ④ 自己の生き方についての自覚を深める。

具体的な学習活動

地域や学校の実態に応じ、各学校が学習課題を掲げ、創意工夫を十分發揮して課題解決のための学習活動を展開します。

- 「国際理解」「情報」「環境」「福祉・健康」等の横断的・総合的な課題
- 児童の興味・関心に基づく課題
- 地域や学校の特色に応じた課題 など

- 社会体験—自然体験、ボランティアなど
体験的学習—観察・実験、見学・調査、発表・討論、ものづくり・生産活動

実施上の留意事項

- ① ある時期に集中的に行うなど、弾力的に時間を設定する。
- ② グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態を工夫する。
- ③ 外部の人材の協力や全教職員が一体となって指導するなどの指導体制を工夫する。
- ④ 地域の豊かな教材や学習環境を積極的に活用する。

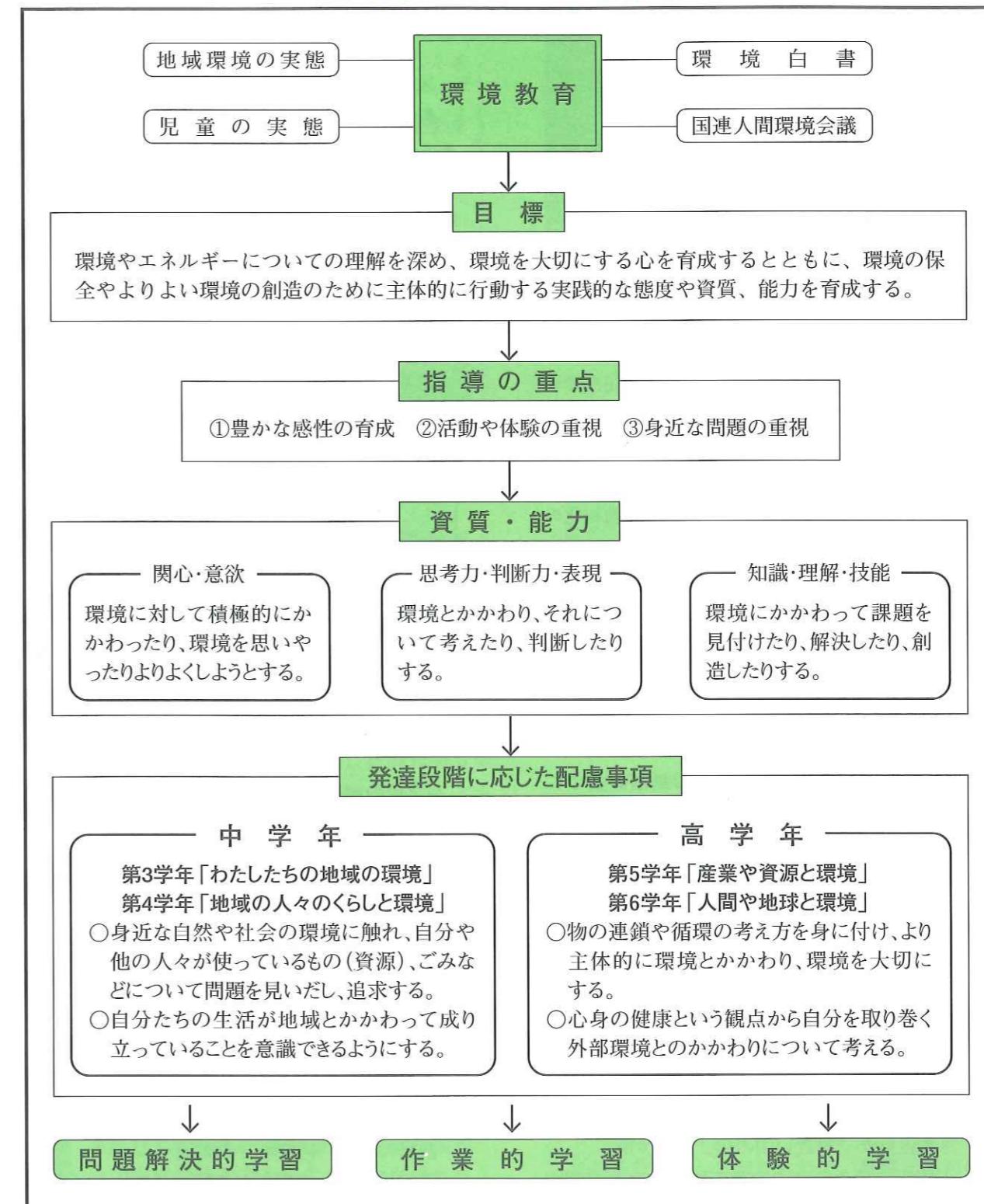
評価の方法

- 活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などに見られる学習の状況や成果などについて、児童のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価する。指導要録の記載においては、評定は行わず所見等を記述する。

今回は、具体的な学習活動として示されているものの中から、横断的・総合的な課題とされている「学校と家庭や地域社会との連携を図った『環境教育』」の全体指導構想について考えます。

現行の教育過程の中で、2002年からの第3学年以上における『総合的な学習の時間』の完全実施に向けて、今、どのように指導実践していくべきかについてまとめてみました。

《『環境教育』の全体構想》



参考文献等 「教育課程審議会答申」

「環境教育指導資料」(小学校編) (文部省)

「小学校『総合的な学習の時間』研究の手引き」(小島邦宏・羽豆成二編)

大蔵省印刷局

明治図書

地域の特色を生かした教材の工夫

第6学年「土地のつくり」における実践

所員 山下 正俊



1 はじめに

6年の「土地のつくり」の学習が始まろうとすると、「近くに地層がないから困る」という声をよく聞きます。教科書に地層の観察が書かれているからでしょうか。

小学校指導書理科編（文部省）のP29には、「～自分の住んでいる土地を扱うようにする。」と明記してあるにもかかわらず、学校周辺に見られる「土地のつくり」に関する様々な物の教材化は進んでいないようです。自分が住んでいる地域の土地の成り立ちを、観察を通して推論してみることは、とても魅力的な活動だと思います。

ここでは、「土地のつくり」に関する教材化の進め方や地層が観察しにくい火成岩（マグマが冷え固まってできた岩）地帯、平野部での学習の進め方について、神埼町での実践をもとに紹介したいと思います。

2 教材化の手順

① 学校の地下や周辺では、どのような種類の石が見られ、その周辺の地形がどのようにしてできてきたかを調べる。

【調べる方法】

a ボーリング資料（建物を建てるときに地下の様子を調べるために掘って出てきた物）を調べる。（学校にない場合、教育委員会に問い合わせる。）

b 『ふるさと佐賀の自然』（佐賀県教育委員会 平成9年度編）を読む。

c 教育センターに問い合わせる。

② 観察できる場所を探す。

- ・校区内か一番近い山の崖、3~4カ所
- ・周辺で見ることのできる特徴的な石が採取できる場所

- ・平野部では、ボーリングサンプルの中に見られる石が採取できる場所（その地域の上流部）

③ 授業と同じ手順で観察、採取を行う。

3 単元構成の工夫

教科書では、水の働きでできた地層（堆積岩）から火山の働きでできた岩石（火成岩）の順番で単元を構成しています。ここでは、下の2つのキーワードで単元を構成し直してみます。

「身近なものから遠くのものへ」

学校を中心に、同心円状に学習の対象が広がるように単元を考える。

例えば、学校の周辺で火成岩が観察できるところは、以下のような学習が考えられる。

- 第一次：学校の地下について、ボーリング資料等の観察を行う。
- 第二次：学校の周辺について、露頭観察や採取できる岩石（火成岩）の観察を行う。
- 第三次：学校の周辺で見ることのできない岩石（堆積岩）について標本などを使って学習する。
- 第四次：第一次から第三次までの結果を使って、学校の周辺の土地の成り立ちについてまとめる。

※学校の周辺で堆積岩が観察できるところは
第二次と第三次で扱う火成岩と堆積岩を入れ替えて、単元を構成する。

「観察（→整理→推論）→実験→推論」

観察したことをもとに、土地の成り立ちについて予想し、実験を通して考えを確かめる。上記の第二次、第三次それぞれの学習を取り入れ単元を構成する。

4 授業の実際—神埼町での実践—

この地域は、平野部に学校があり、近くの山は脊振山系で、地層が見られない火成岩（花崗岩）からできている山です。

【単元構成と学習活動】

導入

第一次
学校の地下

第二次
学校の周辺
火成岩

第三次
他の地域
堆積岩

・ビデオ（火山活動や化石の発掘など）やスライド（崖や工事現場の地下の写真）を使って、地下の様子に興味を持たせる。

学校の地下の様子を調べよう。

- ①運動場を掘って土の色の変化や出てきたものを観察する。
- ②ボーリング資料を使って地下の様子を調べ、まとめる。
- *深さ別のボーリングサンプル（ボーリングによって掘り出された土や石）がある場合、深さ別に用紙に貼りつけ、その貼りつけたものを縦につなぐと、学校の地下の様子がわかる。

近くの山は、どんな土地のつくりになっているのだろう

- ①学校近くの山の土地のつくりについて予想し、露頭観察の計画を立てる。
- ②露頭観察を行う。（写真）
- ③採集してきた石を調べたり、観察結果をまとめたりする。
- *露頭観察は、安全面に気を付ける。
- *どこも同じ火成岩からできていることがわかる観察のポイントを教師が事前に選んでおく。
- *どの崖を観察しても同じ石であることから、1つの山が全部同じ花崗岩からできていることを推論する。
- *採取してきた石や砂をボーリングサンプルと比べる。
- ④採取してきた石や砂を岩石標本と比べマグマからできる岩石について調べる。

学校から離れた地下はどうなっているのだろう

- ①学校から5kmほど離れた他の学校などのボーリング資料を数カ所調べ、地下の様子を比べる。
- *佐賀平野の地下には、約9万年前の阿蘇山の火碎流でたまたま火山灰が見られるので、ボーリング資料を集めるとそのつながりがわかる。
- ②堆積実験で地層のできかたを調べる。
- ③他の地域の地層や化石について調べる。

まとめ

- ・周辺（学校から見える範囲）の土地のつくりについて、観察や調べてきたことをもとにまとめる。



写真 花崗岩露頭を観察する児童

【児童の感想】

今まででは、がけなどがあっても何も思わず通り過ぎていたけど、授業で目的を持って計画を立てて調べてみると今まで気づかなかつたことがたくさんわかった。

山は、大昔からあるものだと思っていたのでこのあたりの山が昔、海の中だったなんてとても信じられないけど不思議だ。

5 県内に見られる火成岩

佐賀県内では脊振山系が花崗岩、松浦半島方面が玄武岩、鹿島方面が安山岩といったように地域によって特色ある火成岩が見られます。

佐賀県の火成岩は、花崗岩以外はほぼ火山の活動によってできた岩石といえます。

6 おわりに

地層にとらわれることなく、自分が住んでいる土地を調べ、目の前に見える山がどんな変動を起こして現在に至ったかがわかることは、とても楽しく夢のあることだと思います。土地のつくりに限らず、学校の周辺に見られる様々なものを教材として取り入れて、日常と関わりのある魅力的な理科授業をつくっていくことが大切だと考えます。

問い合わせ 山下正俊

(E-mail edg 40982 @ saga-ed.go.jp)

四領域の有機的な関連を図った 「英語Ⅰ」の指導と評価

—「書くこと」に焦点をあてた指導を通して—

所員 藤田 俊哲



1 はじめに

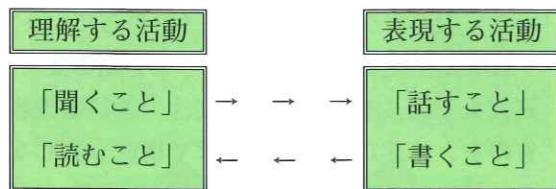
今年7月に出された教育課程審議会の最終答申によれば、新教育課程で新たに必修となる「高等学校外国語」改善の具体的事項として、「聞くこと、話すこと、読むこと、及び書くこと」の四つの領域の言語活動の有機的な関連を図った指導の重要性があげられています。

ここでは、特に四つの領域の総合的な扱いを主旨とする「英語Ⅰ」の指導と評価の在り方について考えてみたいと思います。

2 四領域を有機的に関連付けた「英語Ⅰ」の指導について

現行の学習指導要領においても、「英語Ⅰ」の指導について「聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの言語活動については、いずれかの活動に偏ることがないようにする」とあります。このことは「いずれかの活動に重点をおいて指導する場合もあるが、常に他の領域との関連に留意し、有機的に関連付けて指導すること」の大切さを述べているものと考えられます。

一人の生徒にとって理解する活動(「聞くこと、読むこと」)が、次の段階として表現する活動(「話すこと、書くこと」)につながり、それが同時に他の生徒にとっては理解する活動となるよう、クラス内で相互にインテラクションが行われる授業展開が望ましいと言えます。



3 指導の実際

「書くこと」に焦点をあてた「英語Ⅰ」の指導実践を例にして、具体的に四領域を有機的に関連付けた指導について考えてみたいと思います。

その際、生徒同士の相互評価や自己評価等を取り入れ、生徒の活動への意欲や取り組む姿勢を積極的に評価することが大切です。

いました。本時のねらいをそのテーマについて自分の考えを「書くこと」におき、1時間の授業の大きな流れを次のように計画しました。

前時の復習 (Listening) →同じテーマを扱った別の教材を読む (Reading) →自分の考えをまとめ、書いて表現する (Writing) →グループ内で意見交換し、相互に評価しあう (Listening.Speaking)

* () 内は主な領域の活動を示している

なお、その際、理解する活動と表現する活動とが相互に関連し合うように留意しました。

また、ALTとのチーム・ティーチングを行うことで、生徒が英語を聞き、話すことが自然な状況になるように工夫しました。

さらに、グループ活動を取り入れることで、できるだけ多くの生徒に活動の場を与えるように試みました。(資料①)

4 考察

生徒の書いた英文は、時間の制約もあり十分とはいえないものでしたが、教材を読み、考え、表現し、最後に発表するという過程の中で、四領域の総合的な言語活動が展開できたのではないかと考えます。

5 評価の在り方

中間・期末等の定期考査による、主に生徒の知識の量をはかる総括的評価だけでは生徒の四つの領域にまたがる活動の評価はできず、生徒の次の活動への意欲にもつながりません。毎時間の授業の中のこまめな評価による生徒へのフィードバックが、その後の指導に生かされると考えます。

その際、生徒同士の相互評価や自己評価等を取り入れ、生徒の活動への意欲や取り組む姿勢を積極的に評価することが大切です。

* 資料①Teaching Procedure

PROCEDURE	ACTIVITIES			MAIN SKILLS	EVALUATION
	STUDENT(S)	JTE	ALT		
Review of the previous reading *T-T *Ts-Ss	Listen. Answer the questions.	Dialogue on the topic related to the previous reading. Write some keywords on board.	Ask the students questions about the dialogue.	*Listening	*Positiveness

Comprehension of the model writing *Ts-Ss	Listen. Try to get the main points.	Explain.	Check their understanding.	*Reading	*Positiveness
--	--	----------	----------------------------	----------	---------------

Writing activity *Ss-Ss	Write their own ideas about the topic.	Have the students write their own ideas on the topic. Walk around the class to help the students.		*Writing	*Ability to write English *Positiveness
Group activity *Ss-Ss	Exchange ideas in each group. Evaluate each other in a group.	Form the groups just as in the previous lesson. Walk around among groups to check how they are doing.		*Speaking *Listening	*Positiveness (Evaluation Sheet)
Closing	Listen.	Make some comments on the lesson.		*Listening	

*T-T (Interaction between teachers)

*Ts-Ss (Interaction between teachers and students)

*Ss-Ss (Interaction between students)

資料②Evaluation Sheet

Speaker's Name	Naoko	Masako	Megumi	Takao
Speakerの意見はReading 1の質問に対してYesですか、それともNoですか？	Yes <input checked="" type="radio"/>			
SpeakerのSupporting Ideasは説得力がありましたか？	A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input type="radio"/> B <input checked="" type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input type="radio"/> B <input checked="" type="radio"/> C <input type="radio"/>
Speakerは意見を積極的に伝えようとしていましたか？	A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input type="radio"/> B <input checked="" type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/>	A <input type="radio"/> B <input checked="" type="radio"/> C <input type="radio"/>
Your comment on the speaker's opinion	Um... think so too!		very good opinion	good opinion

6 おわりに

「英語Ⅰ」の指導の中で四領域の有機的な関連を図るためにには、活動への意欲や取り組む姿勢を、生徒同士の相互評価(資料②)等を活用して積極的に評価しながら、生徒が英語を実際に使用する「活動」や発表する「場」を効果的に授業の中に位置付けていくことが必要です。

<参考文献> 文部省(1989)『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』教育出版その他

「子供たちの音づくり(邦楽・洋楽)」

～地域連携型の音楽活動を目指して～

所員 貞島 紀代子



邦楽を通して

。。。伝統音楽の新しい形。。。

「邦楽」という言葉から、みなさんはどのようなイメージを持ちますか。

確かに、伝統の重みを感じさせるのですが、果たしてどのくらい、私達の生活の中に根付いているのでしょうか。

そのような中、佐賀県内でも常に新しい形の邦楽を求め、精力的に演奏活動を続けている方々がおられます。その一人である、佐賀市在住の田代勝子氏は、西洋楽器との合奏やヨーロッパのクラシック音楽の楽曲を邦楽風に編曲したり、洋楽とのアンサンブルを試みたりするなど、演奏形態の多様なアレンジを試みています。昨年9月に、日本の伝統芸能を代表してハンガリーへ赴き、国立民俗博物館に於いて筝曲を披露したり、ハンガリー国立音楽学校の生徒と共に演じ、邦楽による国際交流に寄与しました。国内では、小学生の合唱団と共に演じ、邦楽の持つ日本独特の響きで創造的な「音づくり」を目指した音楽活動を行うなど、邦楽の新しい道を開いていると思われます。

「子供たちに『邦楽の楽しさ』を伝えたい」…このような私達と同じ願いを持ち、邦楽の新しい形を追い求めている姿に、伝統音楽を継承する人としての誇りが感じられます。

佐賀の地でも、ようやく子供を対象とした邦楽祭が開かれるようになってきました。佐賀市文化連盟（芸能協会）が主催したこの企画は、邦楽を体験している一握りの子供たちが、他の多くの子供たちへメッセージを送るための大切な試みだと思います。佐賀の邦楽界の担い手である、新鋭達の成長が楽しみです。



洋楽を通して

。。。ジュニアオーケストラ佐賀の活動。。。



音楽を自分のライフワークとして、学校以外の仲間達と共に活動を始めた子供たちがいます。練習会場に足を踏み入れると、子供たちの熱気が伝わってきます。「この子供たちは、本当に音楽を楽しんでいる」と、実感することができます。彼らの活動を通して、平成7年度九州音楽教育研究大会（佐賀大会）のテーマ『音楽がうごく、はたらく、いきる』の精神が佐賀の音楽教育に深く根付いてきているのを感じます。練習は、第2、第4土曜に行われており、佐賀県下の小学生、中学生、高校生、合わせて約80名近い子供たちが集います。構成メンバーは、現在学校で金管バンド部や吹奏楽部に所属している子供の他、30名程の弦楽器を習っている子供たちです。彼らの心は、「アンサンブルの魅力」でつながれているのです。

このジュニアオーケストラの発足は、教育改革の新しい風を受けて、地域や学校、児童生徒の実態に応じた弾力的な指導を推進していくようにという願いのもとに実現されました。これは、2002年からの学校週5日制の完全実施に対応できる新しい音楽活動です。県内の音楽関係者の支援を何よりも必要としています。

今年度の主な活動

- 9/23: 佐賀国際音楽祭出演（佐賀市文化会館）
単独演奏とロシア・エルミタージュオーケストラとの共演
- 9/26: 佐賀西高校第3回生記念事業演奏会出演
(佐賀県美術館ホール)
- 11/3: 第2回定期演奏会（佐賀市文化会館）
※練習は第2, 4土曜日、佐賀市文化会館リハーサル室

校内研究

～我が校の取組～

地域と共に生きる学習指導法の研究

－体験的活動を通して－

武雄市立朝日小学校長 山口 秀之

本校は、6年間の生活科・社会科の研究成果を基に、社会とのかかわりの中で地域のよさを知り、その成員として生活に生かそうとする子供の姿を求め、研究を進めている。

研究の柱として身近な地域素材の教材化を図り、子供が設定した問題を解決する過程の中に、地域の人々との交流活動や学んだことを生かす実践活動（体験的活動）を位置づけて取り組んでいる。

また様々な交流活動（調査、作る、遊ぶ、討議、インタビュー等）や実践活動（書く、写す、話す、生活体験、社会体験、自然体験等）を取り入れ、個に応じた支援をするため、チームティーチングを活用することにする。

このような学習活動が契機となって、子供自身が自分の住んでいる地域について改めて見つめ直し、そのよさを認識し進んで生活の中で生かしていくこうとする態度が育ってくると考えている。そのためにも地域、保護者等と密接な連携を図りながら、地域に開かれた学校作りを目指している。



思いやりの心をもち、進んで実践する

生徒を育てる教育

～「認め合い支え合う集団作り」を通して～

伊万里市立東陵中学校長 栗原 崇

本校は、平成9・10年度に文部省、県教育委員会、市教育委員会より「豊かな心を育む教育推進事業」の実践協力校として指定を受けている。

研究の柱は、道徳教育の充実にあるが、学校教育全体の中で、思いやりの心や感謝する心、奉仕の精神などの道徳的実践力を培う体験活動に力を入れている。

研究専門部は、「体験活動部」「授業研究部」「仲間づくり部」の3部会としている。「体験活動部」では、体育祭や文化祭、平和学習会や人権討論会での生徒会を中心にした生徒の主体的活動、障害者や高齢者との交流、地域の清掃美化活動、職場見学や職場体験活動などの取り組みがある。「授業研究部」では、教材の工夫や体験活動を通し、共感を高める授業づくりに取り組んでいる。「仲間づくり部」では、容認・支援の集団づくりをめざしたゲーム的要素を取り入れた「レクタイム」での参加体験学習、「気になる子」への支援等に取り組んでいる。



メッセージボード

江崎玲於奈先生を迎える

教育センター教育講演会開催する

教育委員会制度50周年を記念し、平成10年度教育講演会（県教委主催、教育センター主管）が去る8月4日（火）佐賀市文化会館において、昭和48年にノーベル物理学賞を受賞された江崎玲於奈先生（前筑波大学長）を講師に迎え、開催されました。

これからの教育に視点を置く「創造力をはぐくむ教育」と題してアメリカでの豊富な経験談を交えながらの講演は、県内各地から集まった市町村長、小、中、県立学校の教職員、教育行政関係者等、約800名の参加者に深い感銘を与えました。

講演の中で先生は「社会資本としての有為な人材を育成すること」、「その能力を見いだし、自己発見させることによって個人の知的資本を作ること」との2点を強調されました。

さらに創造力を発揮するためには、「澄みきった目で見る」「自由奔放な若さを失わない」「初々しい感性を失ってはいけない」等と述べられ講演をしめくくられました。



講演される江崎玲於奈先生

平成10年度 長期研修生の紹介

氏 名	所 属 校	研修領域	研究 主 题
井 手 麻 里	伊万里小	国 語	豊かな学び手をはぐくむ国語科学習指導
中 西 穂 澄	嬉野 小	〃	コミュニケーション能力の向上をめざす国語科学習指導法の研究
嶺 川 竜 一	田頭 小	社 会	問い合わせ続ける子供を育てる社会科学習法の研究
松 尾 暢 弥	朝日 小	〃	学ぶ喜びを感じる社会科学習指導法の研究
塚 原 輝 明	諸富南小	算 数	算数を学ぶ楽しさを育てる指導法の研究
岡 純 子	基山 小	〃	子供一人一人の考えを生かし、学ぶ意欲を伸ばす算数科指導法の研究
前 川 英 司	呼子 小	理 科	自らの考えを生かし、探究する楽しさを味わわせる理科学習の研究
馬 郡 茂	本山 小	図画工作	自らの感性を働かせ、主体的に表現する力を高める図工科指導法の研究
島 孝 彦	三田川小	特別活動	自ら健康を考えたくましく生きる子供を育てる健康教育の研究
富 永 美 枝	赤松 小	教育相談	教育相談における養護教諭と保健室の在り方に関する研究
三戸谷 史	桜岡 小	〃	学級経営に生かす開発的カウンセリングの研究
三 根 正 巳	北鹿島小	環境教育	環境問題を身近にとらえ、主体的に関わる実践的態度を育む環境教育の研究
丹 宗 志津子	城北 中	国 語	一人一人が生き生きと学ぶ喜びを感じることができる国語科指導法の研究
池 田 新	川登 中	数 学	数学的な見方や考え方を育てる学習指導法の研究
岸 川 和 彦	山内 中	理 科	生徒の問題解決意欲を育てる理科学習指導法の研究
小 佐 々 良 介	肥前 中	特別活動	個を生かし豊かな人間関係を育てる学級づくりの研究
池 田 正 昭	嬉野 中	生徒指導	問題行動を繰り返す生徒への対応に関する研究
大 園 隆二郎	佐賀西高	地理歴史	日本史Aにおける史料集のあり方と素材の研究
永 益 和 弘	唐津北高	〃	生徒が主体的に取り組む地理学習指導の研究
江 口 昌 子	鹿島実高	家 庭	コンピュータを活用した被服製作の教材に関する研究
中 原 正 幸	多久工高	工 業	工業教育における他分野技術の習得とその方法
小 松 原 修	金立養護	特殊教育	友人や教師との関わりを広げるためのコミュニケーション指導法の研究
藤 野 孝 治	大和養護	〃	重度障害児のコミュニケーション指導法の研究

編集・発行 佐賀県教育センター

〒840-0214 佐賀県佐賀郡大和町大字川上字西山

TEL 0952-62-5211 FAX 0952-62-6404

ホームページ <http://www.saga-ed.go.jp/>